



令和2年度

鹿児島県の教育

4・5月号

巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事長
鶴丸高等学校長
泉連合校長協会会長
月野 功

年度はじめに当たって

本協会はこの四月に、新たに百三十九名の会員を迎え、小学校長部会長には六笠登由先生が、中学校長部会長には大久保哲志先生が就任されました。皆様のご協力をお願いいたします。

さて今年に入って本県でも臨時休業を二回も実施するなど、学校現場は新型コロナウイルス感染症の大きな影響を受けています。

文科科学省が五月一日に公表した「学校における新型コロナウイルス感染症の対策に関する懇談会提言」には、「学校における感染リスクをゼロにするという前提に立つ限り、学校に子供が通うことは困難であり、このような状態が長期間続けば、子供の学びの保障や心身の健康などに関して深刻な問題が生じることとなる。」そして、「社会全体が、長期間にわたりこの新たなウイルスとともに生きていかなければならないという認識に立ち、その上で、子供の健やかな学びを保障するということとの両立を図るため、学校における感染及びその拡大のリスクを可能な限り低減しつつ段階的に実施可能な教育活動を開始し、その評価をしながら再開に向けての取組を進めていくという考えが重要である」と示されています。

五月十一日以降、本県でも多くの学校が再開され、感染リスク低減のために様々な取組

をしていくこととなります。その過程でこれまでの形態や規模では実施できない教育活動については大幅に見直したり、見送らざるを得ないものも出てくると考えられます。場合によっては児童生徒や保護者に、今年に残念な思いをさせてしまうかもしれませんが、我々は一つ一つを丁寧検討し、最大限の教育効果を上げる努力をする必要があります。私はこの努力はきつと新たな教育的価値を生み出すことにつながると確信しています。

歴史を紐解くと人類は感染症のパンデミックを幾度となく経験してきました。十四世紀のペスト禍が欧州ではルネサンスの触媒となり、中世から近代へと社会の転換をもたらしたように、今般のパンデミックを境に世界中で働き方や経済活動、医療、教育、生活様式など多くのことが本質的に変わるニューノーマル(新常态)が到来する可能性があると言われています。

我が国においても、政府が九月入学・始業の議論を開始するなど、大変革の時計がこのウイルスによって早回しされるかもしれません。

先を見通せない不安がありますが、「今は歴史的瞬間。子供たちや次世代に我々がいかに努力したか、誇りを持って語り継いでいけるようにしよう。」というクオモNY州知事の言葉のとおり、私たちも職員とともに日々取り組んでいこうではありませんか。

* おもな内容 *

巻頭言	1	ある日の校長講話	12
提言	2	読書案内	14
退任にあたって	4	一般(助)県校長会館だより	16
新任の抱負	7	編集後記	16

令和2(2020)年 4・5月号

一般財団法人 鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844



家庭学習の習慣化に向けて

伊敷小(市) 田 畠 悦 子

「子どもが宿題をしてこないから、昼休みに残してやらせている」と、学級担任が嘆く声を聞く。しかも、学年が上がるにつれてその嘆きは大きくなったり、増えたりしていると感じる。宿題という担任との約束に責任を持たせる意図で昼休みや放課後を使うのであるが、家庭学習の習慣化につながっているとは言いがたい。しかも、全国の話題として、中学校や高等学校でも、家庭で勉強しない子どもたちが増えていると聞く。

主体的に家庭学習に取り組むことで、習慣化されると思うが、大きな長年の課題だと感じている。

一 家庭学習の意義

家庭での学習の必要性を述べる上で、ドイツの心理学者ヘルマン・エビングハウスの忘却曲線は欠かせない。学習後、時間をおかず、しかも定期的に復習することは、授業での学習の定着に大きな役割を担っていることが分かる。ただ、家庭学習の役割はそれだけではない。

新学習指導要領の総則の「確かな学力」の項で、小学校教育の早い段階で、家庭と連携を図りながら学習習慣を確立することは、その後の生涯にわたる学習に影響するきわめて重要な課題であるとし、家庭学習の重要性を

示している。

超高齢時代が到来し、心身ともに健康な生活を実現するためには、生きがいとして追求できるものがあることが大切であり、学び続ける自分づくりが求められている。それは、授業の学びの体験をさまざまな場面で生かすことであり、家庭学習の先につながっているものである。

二 主体的に取り組む家庭学習

主体的に学ぶ意欲と態度の育成については、キャリア教育の充実において強く求められている。子ども一人一人が夢を語り、その実現のために必要な学習を計画し、家庭で実行する実践である。長期的な取組であり、成果を上げているが、子どもの能力・適性、興味・関心、性格等は異なり、指導に難しさを感じている。

子どもたちが、家庭学習に取り組んでよかったと実感することが、主体的な家庭学習に大切だと思う。そのためには、家庭学習の成果が、毎日の授業に生きたり、家庭学習の成果として自分の成長を知るなど、明日という身近な将来に役立つことを子どもたちが気付く必要がある。

三 家庭学習とのつなぎを位置付けた授業づくり

家庭学習を視野に入れた授業展開をする。

そのために、終末の時間を十五分程度確保し、そこで家庭で取り組む課題を子どもが計画するまでを授業だと捉えるようにする。

家庭学習の計画の立て方は、発達の段階への考慮が必要である。低学年では担任が主となり、プリント類を与えていく。中学年では、プリントだけでなく、ノートの書き取りや調べ活動に取り組ませたり、それぞれの興味・関心に応じた課題を選択させたりするなど、質や分量を自分で決める家庭学習を計画する機会を増やしていく。高学年では、授業終末の小テストなどで、自分の学習状況を振り返りながら、家庭学習の内容や分量、方法を計画させていくようにする。授業での自分の学習状況を基にした家庭学習であるため、子どもたちは、授業で難しかったと思った問題に再チャレンジしたり、よく分かった問題の発展問題に取り組んだりする。また、放課後の過ごし方を考えながら、分量を決めるため、無理なく取り組むことができる。家庭で取り組んだ学習で分からなかった問題については、そのままにせず、翌日担任に確認するようにする。そうすることで、授業内容の理解が深まり、学ぶことの喜びにつながると考える。

担任は、子ども一人一人の取組状況によって、必要に応じて個別に相談しながら、内容や分量など、家庭学習の提案や指導することに重点を置く。子どもたちは、定期的に家庭学習の取組を自己評価しながら見直し、改善していくようにする。

何事においてもそうだと思うが、自己決定することで責任感が育ち、習慣化につながる。と考える。



よいものに学ぶ

甲南中(市) 中 崎 新一郎

世の中には、学ぶべきよいものが数多くある。教育実践の世界でも同様である。

よい授業は、これまでもよい授業であったし、これからもそうである。今、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が必要であると言われているが、これまでも、よい授業と言われるものは、このような内容を実現していた。求められている授業改善とは、これまでの数多くの授業実践の中から、よいものを掘り上げ、より広く実践を求めているものと考えられる。学校には、授業以外にも、その学校の伝統と呼ばれるような取組がある。登下校時の門礼、無言清掃、体育大会の競技種目、文化祭の演目など、長年にわたりその学校がよい形で受け継いできているものである。伝統として守られてきているものは、時に形骸化することがあっても、意義を見直すなどして、長年にわたって行われているものであり、このような取組が成果を挙げているのを見ると、そのよさを真似てみたいと思う。

ある中学校を訪問した際、校舎の玄関付近に、生徒の水彩画の作品が整然と何枚も展示されていた。そのどれもが、街の風景を確かなデッサンと巧みな色遣いで仕上げられており、このような作品を創り上げる生徒たちがいること、それを指導する教師がいることを羨ましく思い、是非自分の学校でも真似をしてみたいと思ったことがある。

教師自身がよいものを知らなければ、よい指導はできない。よいものとは何か。それは、そのような技術や知識、感性などを身につけたい、真似をしてみたいと思わせるものである。そこには、感動があり、高揚感がある。

ゲーテは、「われわれがもっとも純粋な意味でこれこそ自分たちのものだといえるようなものは、実にわずかなものではないか。」(「ゲーテとの対話」エッカーマン著)といい、われわれはみな、われわれ以前に存在していた人たち、およびわれわれとともに存在している人たちから学ぶべきだと述べている。つまり、独創と言

われるものは、稀な場合に現れるのであり、その前に、よいものに学ぶ、よいものを真似るということが大切だということである。

二十代の頃、ある学年主任に仕えた。学年だけでなく十六人の職員がいた。朝は職員にお茶を出し、研究授業をすれば慰労に連れて行き、難しい仕事を任せるときは、「ごめんなあ。」と申し訳なさそうに言い、行事等で大した成果も出していないのに「よくやり遂げたなあ。」、学年の職員朝会では、ことある毎に「先生方ありがとうなあ。」、おだてられているとはわかっていても、やる気にさせる名人芸とでもいうべきものであった。誰もが名人になれるわけではないが、学ぶべき管理職の姿の一つであったと思う。

これまでに、多くの先輩がおり、周りを見渡せばすばらしい教育実践を行っている学校がある。私たちに必要なのは、過去から現在に至るまでの、よい学校経営をしている人に学ぶこと、よい職員指導をしている人に学ぶこと、よい教育活動を行っている学校に学ぶことなど、よい教育実践に学ぶことである。

これらの学びの中で、自分自身の学校経営の現状と課題、今後の目指すべき方向がより明確になってくるのではないかと考えている。



ペイ・フォワード

一般財団法人鹿児島県校長会館前理事
前県連合校長協会小学校長部会長

前鹿児島市立玉江小学校長
上村芳郎

退任にあたって

早かった。本当に、この一年は早く過ぎ去った。すばらしい連合校長協会の仲間にも恵まれ、実に貴重な経験をさせていただいた。何一つ思返しのようない仕事はできなかった。後を託すしかない今の状態を申し訳なく思う。そして、今さらながら、つくづく感じることもある。それは「何かを変えるためには仲間が必要である」ということだ。自分一人では何もできない。しかし、夢を語り、そのつぶやきに賛同した仲間が一人いれば、何とかその次につながる。

この原稿に向かいながら、二十年前の映画をふと思い出した。タイトルは「ペイ・フォワード」。かつて、この映画から大いに感化された時期があった。ストーリーはこうだ。中学一年の主人公が、社会科の授業で担当の先生と出会う。先生は「もし、自分の手で世界を変えたいと思ったら何をする？」という課題を与えられる。生徒のほとんどは、いかにも子供らしいア

イデアしか提案できなかったが、彼は違った。それが「ペイ・フォワード」。自分が受けた善意や思いやりを、その相手に直接返すのではなく、別の三人に渡すというシンプルな発想から生まれたものだ。

簡単に説明すると、ペイ・フォワードとは、こんな仕組みである。AさんがBさんに何かを与える。次にBさんは、そのままAさんに恩を返すのではなく、別のCさんに与える。そしてCさんは、AさんやBさんに対して恩を感じながら、次の世代へより多くのことを伝えていく。こうしていくうちに、やがて社会には互いを思いやり、自然に後進が育ちやすい循環が生まれる、というものである。

もしかすると、ペイ・フォワードの概念は、連合校長協会の働きにも通ずるものがあるのかもしれない。私は、校長初任の頃、地域で校長会の役職をもらうことに抵抗を感じることがあ

った。外部の面倒を嫌い、自校の経営に専念させてもらいたい、こんなはずではなかったと思う日もあった。きっと内部役員の献身的な業務が見えていなかったからだろう。

しかし、県大会や九州大会の運営に携わるようになり、初めていろいろなことに気付いた。これは、だれかがだれかのために恩を返すのではなく、恩を後に続く者へ伝えていくことが大切なのだ・・・。

もちろん、こんなことはあくまで理想に過ぎないと感じる人もいるかもしれない。他人から搾取する一方で、誰にも与えない人間が得をするだけではないかという疑念もあることだろう。しかし、最後の一年を小学校部会長として各種会合に多く出席する中で、これまでずっと先輩方は「ペイ・フォワード」を大事にしていたんだらうと、今さらながら強く思う。

鹿児島県の特徴である、小・中・高校・特別支援学校が連合体となって組織され、脈々と流れているこの校長会が、さらに発展していくことを願う、これからは静かなる応援団となっていきたい。



「我以外皆 我が師なり」

一般財団法人鹿児島県校長会館前理事
前県連合校長協会中学校長部会副部長
寺園 伸 二

教員生活の最後に、大切な生徒を小児ガンで失った。私は彼に大切なことを教えてもらった。「校長先生へ。お元気ですか。ほくは先生の想像を超えるほど元気です。ほくは入院しても退院しても伊敷中学校の生徒です。ご迷惑をかけると思いますが、よろしくお願いします。」

バトミントン部に所属して明るく元気に学校生活を送っていた彼が、膝が痛いと訴えて検査した結果、骨肉腫が見つかったのは中学一年の二学期終了間際だった。闘病生活が始まったが、彼は苦しい抗がん剤治療の最中でも、学校行事の度に病院を抜け出し、遠足では車でバスを追いかけて目的地で合流したし、スケッチ大会では、学級の友だちと笑顔の集合写真を撮った。常に明るく気丈に振るまうお母さんと、優れく穏やかなお父さん、仲の良い兄弟に支えられ、彼はいつも前向きで、闘病生活を送っているという悲壮感を表に出すことは決してなかった。

計報は、修学旅行に一緒に行けるように家族の部屋を同じホテルに予約した直後に届いた。たくさんの同級生や部活の仲間が弔問に訪れたお通夜の会場には、穏やかな顔のM君が小さな棺の中に横たわっていた。「一切弱音を言わなかった。我が子ながらよくがんばりました。」と話されたお父さんの涙声が耳から離れない。彼は、自分の人生を精一杯生きたのだと思うと胸が熱くなった。

翌朝、「斎場から火葬場へ向かう途中、学校へ寄らせてもらえませんか。」と葬儀社から電話があった。保護者が望むならと返答したが、その時間が昼休みに当たるので、校庭でサッカー等をしている生徒たちの反応が心配で、昼休みの過ごし方について生徒に細かく指示するはずいぶん迷った。霊柩車が正門の前に横付けし、長い長いホーンの音が鳴り響いたとき、校庭にいた全ての生徒が正門前に自然に集まり、黙祷し、霊柩車が学校の角を曲がって見えなくなるまで頭を下げ続けてくれた。心配しなくても生徒は命の尊厳を直感的に理解してくれていた。目の前の手立ても大切だが、教育の本質はそこではないと再認識させられた瞬間だった。

最後の一年はコロナウイルスの対応をはじめ、まさに想定外の対応を迫られることも多く、連合校長協会の必要性をあらためて実感させられた一年だった。校長の仕事は判断の連続であ

る。ともすれば上手く問題を解決することが目的になってしまっていないかと不安になる。連合校長協会の存在意義は、連携を図りながら共通の課題をスムーズに解決することや情報交換をすることによって自校の課題解決を円滑に行うことにあるのだと思う。しかし、実は課題解決の方向性を模索する会話の中に見え隠れしている互いの教育観や生徒観、指導観に触れることで、どういう判断をすれば真に生徒のためになるのかについて、あらためて考える機会になっていたことに今になって気づかされた。

縮小開催の卒業式で私は「人生は素晴らしい。しかし、自分の思いどおりにならないことも多い。そんなとき『それがどうした』と自分を鼓舞して立ち上がる。そんな生き方が大切だ。」と卒業生に呼びかけた。学校教育にはこれからも多くの課題が降りかかってくるだろう。理不尽なこと、想定外のことも多いだろう。しかし、『それがどうした。』である。学校のトップである校長が、高い志をもち「教育は国家百年の計である。」との信念のもと、大所高所から課題解決にあたるのが、この国の未来を創ることになると、校長である我々が信じなくて誰が信じるのか。校長の責任は重い。

高い志をもって、教育に携わる者としての自信と誇りを胸に「がんばれ、連合校長協会。負けるな連合校長協会。」である。あえて逆説的な言い方で、心を込めてエールを送りたい。「連合校長協会の前途多難を祝して乾杯」



想像を超えるとき

一般財団法人鹿児島県校長会館前理事
前県連合校長協会特別支援学校校長会副部会長

前武岡台養護学校校長
中村周一郎

誰が想像しただろうか、こんな三月を。退職のときに、日本中が、世界が、その対応のあり方を迫られているとは思ひもなかった。三十三数年勤め上げて、教員に、学校に別れを告げるとき、その長い道のりを振り返って、充実感と満足感と、そしていくつかの後悔をかみしめながら、今後の生き方を誓って感傷に浸る三月を想像していただろうか。

一月、二月と、報道から気味の悪い空気が忍び寄ってきていた。私たちは様々な危機に對して、自らの知見と経験を基本にして判断し、行動する。だから「これまでの経験を踏まえて今回もうまく乗り越えられる」と思って行動する。しかし「今回はこれまでとは違う」と報道は危機感を煽る。実際、予想もしなかった決断が中央からなされ、動揺しそうな心を抑えながら対応を考える。学校や教師にとつては、子供の成長や学び、安全が一番なのであって、そこを守ることをまず重視する。今日では、それに加えて保護者の理解や安心が学校（教員）意識として重要な部分であることは間違いない。しかし今回は、更に保護者の仕事や生活まで念頭に置

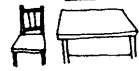
かなければ、対応を間違える恐れもある。組織のリーダーとして、慎重さ、丁寧さ、迅速さが求められる日々である。管理職として、これまで培った能力のすべてをあげて判断し行動を求められることでもあった。

教員としての自分を振り返ってみる。私は、大学を卒業後、知的障害者施設に勤めた経験から、障害児教育に関心をもち教師になった。そのため、現場主義の感覚が強く、若い頃は専門的に障害児教育を学んだ同僚とは指導観の部分でぶつかることが多かった。生活に根ざした内容を重視し、それまでやってこなかった学習内容も多く取り入れた。また、既存の学習で時代にそぐわない内容は削除してきた。当然、反発も多く、その都度同僚と議論を重ねた。必要性を感じた内容には意欲的に取り組み、個別の指導計画の作成、特別な支援の必要な子供や教師に対する巡回相談などは積極的に取り組んだ。近年、特別支援教育では私たちが求めていた指導内容やその枠組み、指導方法などはかなり充実し、現場の教師には、それらの整理と適切な実践が求められている。

さて、教員生活で、感銘を受けたことを一つ伝えたいと思う。大島養護学校の地域の懇親会の席で、退職された教育関係者から聞いた四十数年前の話である。春先の長雨で校舎の建築が遅れ、隣接する「希望の星学園」で入学式や四月の授業が行われたことは知っていた。ところが、その前に様々な背景があった。「希望の星学園」は、大島養護学校が設置される十一年前に、奄美に暮らす知的障害の子供たち及びその保護者を、心身共に支えるために設立された。奄美群島各地から知的障害のある子供たちが入所していたが、子供たちは就学猶予により教育を受ける機会がなかった。そのとき、近隣の赤徳中学校の教師たちは「この子供たちにも、なんとか教育を受けさせたい」と切実に思い、時間外にボランティアで「希望の星学園」での教育を実施した。そして、その後「希望の星学園」内に県内で初めての院内特別支援学級が開設され、それが大島養護学校の前身となった。身震いするような感動を覚えた。私たちが行っている教育という営みには、先人たちの様々な熱意と努力があることを思い知らされた。

私たちは、現在の社会を念頭に教育活動を展開しているが、今後の取組を考える上では、このような過去のことも知っておく必要があると思う。三十数年を振り返ると、初任の頃とは全く違う「今」が存在している。急激な社会の変化や想像を超える出来事が多くなってきた近年、私たちは、その変化に対応すべく生きていかなければならないと感じている。

新任の抱負



初心忘れるべからず

吾平中(隅) 湊 川 彰

一 はじめに

人事異動の発表後、赴任先に縁のある方々から、「吾平はいいところだよ。頑張れ。」と激励を受け、新天地への思いが膨らむ日々を過ごしていた。

今年の辞令交付式は、新型コロナウイルス感染症の影響から、市町村単位で行うことになり、一日の朝、鹿屋市教育委員会に向かった。交付式の当日ともなると、これまでの気持ちから一転して、新たな職務への不安で胸がいつぱいになっていった。厳肅な雰囲気の中で式が始まり、中野教育長から辞令を受けたとき、不安な気持ちが一掃され、吾平中の校長として、「職責を果たさなければならぬ。頑張るぞ。」と覚悟が決まった。

二 日本一の生徒たちとの出会い

「吾平」という地名は、日本書紀神代記に「吾平山上陵」とあるのに由ったもので、古くから稲作が盛んであったが、近年は野菜・果物栽培・畜産などを組み合わせた複合経営農家が多く、「美里吾平(うましさとあいら)」として親しまれているところである。また、吾平中学校は、平成一八年一月から鹿屋市立の学校となり、校区内には三つの小学校(鶴峰・吾平・下名)があり、過半数の生徒が自転車通学を行っている。

生徒たちとの出会いは、衝撃的だった。六日の朝、正門前で登校指導をしていると「おはようございます。」と元気な声で、全生徒が立ち止まってあいさつをしてくれた。生徒にとつて、私が誰なのかまだ分からない状況にあつたにもかかわらず、本校の伝統のひとつである「語先後礼」を率先垂範していた。このとき、「あいさつ日本一。この生徒たちのために精一杯頑張りたい。」と心の底からそう感じた。

三 校訓「向学・規律・協力・剛健」を胸に

生徒たちの幸せを第一に考え、力を付けて送り出すのが学校の責任であると思う。では、そのためには、どのような学校経営をしていくべきか考えていたときに、校長室に掲げられているものに目が止まった。それは校訓で、それぞれ言葉に次のような意味付けをして、職員や生徒に話した。

向学とは、自分を生かす学びのこと。
人には叶えたい夢がある。そのためにも、まず、何をすべきか考え、そして叶えるために必要な力を身に付けられるよう日々努力してほしい。

規律とは、誇れること。

「語先後礼」や「授業の五原則」などの取組を本校では大事にし、これまで長きに渡り

実践されている。そして、学校への愛着と吾平中生だったことへの誇りをもっている。先人に続いてほしい。

協力とは、持ち味を生かし合うこと。

人には、強みと弱みがある。物事を成し遂げて行くには、仲間の力が不可欠であり、お互いの強みを生かしてほしい。

剛健とは、荒波に立ち向かう姿のこと。

困難な出来事は、成長する上での絶好の機会。真正面から立ち向かってほしい。

四 チーム吾平中

鹿児島県人のよさは、「です。です。」と全力肯定するところであるが、この言葉は無意識に発しているため、人から言われて気付く有り様である。人から認められると悪い気はしないもの。今年は、学級増や加配により、昨年度より三人多いスタッフでスタートした。日々の教育活動では、新メンバーも含め、生徒と真剣に向き合い、全力で頑張る職員の姿をよく目にする。学校力をさらに発揮していくためには、それぞれのよさを全力で肯定し合う雰囲気づくりが重要で、その役目は校長が担っているため、日々の関わりを大事にしていきたい。

五 おわりに

「初心忘れるべからず。」という言葉をよく耳にするが、「その時々々の初心というものがある。」と前任地の上司から教わった。事がうまく運ばなくなると志がぼやけてくる。辞令交付式などで誓ったことが薄れないためにも、週や月単位での初心を大事にし、覚悟をもって、決して威張らず、日々研鑽に努めていきたいと思う。

新任の抱負



あまみの子どもたちを光に

小宿小(大) 仲 克 人

一 はじめに

四月一日、空路奄美空港に向かったが、当日の天候は強風で条件付きでの出発となった。奄美大島が眼下に広がり近づいてくると、希望と緊張から少しずつ鼓動の高まりを感じた。

本年度は、新型コロナウイルス対策のため、辞令交付式が奄美市教育委員会で行われ、要田教育長から辞令を受け、身が引き締まる思いと校長としての職責の重さを痛感した。

私の奄美市立小宿小学校勤務は二回目となる。平成七年から十一年まで勤務し、教師としての基本を培った学校でもある。地域や保護者の懐かしい方々にもお会いすることができた。

しかし、前回とは違う立場での赴任、改めて「自分のもてる力を発揮しよう」と誓った。

二 先輩からの教え

着任前、かつて先輩からいただいた校長としての心構えを示した文書を改めて読み返した。そこには、まさに新任校長への道しるべとも言える次の言葉が記されていた。

昨今、学校内外から校長の強いリーダーシップを求める声が増しに高まっている。校長であれば誰でも学校経営が平穩であることを望んでいる。大過なく無事にすぎるのを切望している。しかし、平穩無事が単なる「ことなかれ主義」であってはならない。それは、時代に「負の遺産」を残すことになり、大きな禍根を印すことになるからである。校長には、学校の抱えている問題を鋭く見つけ、未来の課題を深く洞察して、常に学校を変革・刷新していく意欲と実践力が求められている。「現状維持は後退である」という気概でリーダーシップを発揮して学校経営の充実に努めて欲しいものである。

〔中略〕

初めての校長職ということで新鮮な感覚で学校経営・学校改革に意欲的に取り組まれると思うが、未知の世界であることから、

想像以上の戸惑いや気苦労を経験し、自信喪失に落ちることがあるかもしれない。そんな時には「自分が校長に登用されたのは単に教頭(各)としての実績が評価されただけでなく、校長としての職務遂行能力を期待された結果である」と考えてほしい。

三 あまみの子どもたちを光に

四月一日、学校に着任し、まず本年度の学校経営方針を確認した。学校経営の基調に奄美市の基本方針として、「地域に根ざしたふるさと教育」あまみの子どもたちを光に」と示されていた。胸が熱くなった。平成十八年から三年間奄美市教育委員会に勤務していた際に、同僚が奄美の先人の思いを継ぐ気持ちで掲げた言葉がまだ残っていた。

四月六日、子どもたちが久しぶりに登校してきた。朝、連絡会を終える際、保護者や地域に託された子どもたちを「光」にするために校長の思いとして次の文書を職員に配布した。

新学期をスタートするにあたって

批判ばかりされた子どもは
非難することをおぼえる。
殴られて大きくなった子どもは
力に頼ることをおぼえる。
笑いの言わずにされた子どもは
皮肉にさらされた子どもは
鈍い良心の持ち主となる。

しかし、激励を受けた子どもは
自信をおぼえる。

寛容に出会った子どもは

忍耐をおぼえる。

称賛を受けた子どもは

評価することをおぼえる。

フェアプレーを経験した子どもは

公正をおぼえる。

友情を知る子どもは 親切をおぼえる。

安心を経験した子どもは

信頼をおぼえる。

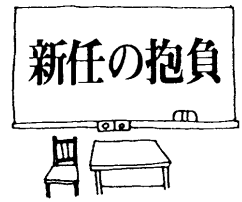
可愛がられ抱きしめられた子どもは

世界中の愛情を感じとることをおぼえる。

ドロシー・ロー・ノルト

四 おわりに

時代は子どもたちの自尊感情の育成を求めている。校長として、次代を生きるあまみの子どもたちが今以上に「光」になるよう失敗を恐れることなく、邁進していきたい。



流れに棹さす

指宿高 紺屋 宏明

まずは、経験豊かな先輩諸氏のお目汚しの失礼をお許し願いつつ、若輩の妄言とご笑覧いただければ幸いです。

一 はじめに

指宿高校は創立九十八年目を迎えた。往年は八学級の規模であったところ、少子化の流れもあり現在は三学級規模となり、ここ数年は入学者が百人を割り込む状況が続いている。しかしながら、生徒の素直さに教師の熱心さが作用して、学校規模に比して高い進学実績を保っている。また、保護者や同窓会等の学校を支えようとする協力意欲が高く、「地域の学校」として高い信頼と期待を得ている学校であると感じているところである。

二 流れに棹さす

本校は早期から特に数学科において、アクティブラーニングに取り組んでおり、学力の向上が著しいことから県内外の視察も多い。実際に授業を観察していると時間帯によらず生徒が生き生きと数学に取り組んでいる。数学科職員の雰囲気もよく、職員室で指導法に

ついでの話が日常的に行われている。本校職員は総じて意識が高く熱心であるが、今後の課題としては、この数学科のノウハウと雰囲気をどのように全体で共有して、これまでの流れを加速させていくかという点にある。

これはただ単に進学実績によって学校の使命を果たすという面だけではなく、これからの教育を担う教員の育成という面でも大きな意味を持つことであり、その点において校長のリーダーシップが要求されると認識している。

三 コンパクトさの利点

南薩学区は県内でも中学校卒業予定者数の減少率が激しい学区である。本校のある指宿市も来春さらに減少が続くと見込まれる。現在、三学級規模の高校であるが、令和二年度は全生徒数二六五人でスタートした。

生徒数が少ないと、生徒の活動（例えば部活動）において寂しさはあるが、反面、このコンパクトさゆえの利点もあると考えている。

ひとつは、全生徒を掌握できる（覚えられる）こと。職員にもお願いしたのは、全職員で全生徒を見ることであり、校長としても全生徒に直接関わりたいと考えている。

もうひとつは、職員数である。教育活動の質を保つには一定の数は必要であろうが、所帯が大きすぎると動きが鈍くなるというリスクもあるのに対し、現在の本校の職員数は機動力という点において、その利点を発揮できるのではないかと考えている。つまり、変わろうと思ったら一気に変わる「ちようどよい」サイズだということである。もちろん、そこには、職員のレディネスも必要であるため、コミュニケーションを中心とした手法による漸次的な変化が必要であろうと考えてはいるが、全体を一括して掌握できるというコンパクトさは組織としては魅力的だと感じている。どんな仕掛けにどんな反応が返ってくるか期待が高まる場所である。

四 おわりに

行政在職中に「募定確保」を至上命令とばかりに無邪気に各校長に「丸投げ」をしていたが、我が身となってみて、それは目的化されるものでもあるまいと反省しきりである。とはいえ、教育の質の維持のためには、現在の学級数の維持とそれに伴う職員定数の確保は本校の喫緊の課題であり、全力で取り組

みたい。

入学式の日、初めて担任を持つ新採教諭が生徒に対して「指宿高校は楽しむところだ」と学校生活を能動的に取り組むことの大切さを説いていた。かつての自分を思い出しつつ、



「誠実、感謝、勤勉」

一 はじめに

十年前に移転整備された本校に教頭として赴任してきた。教頭としては初めてで、着任後すぐに移転整備に伴う記念式典など慌ただしいスタートであったことを思い出す。

その中で、本校の校訓「誠実、感謝、勤勉」の言葉がとても新鮮であり、意味深いと感じたことを思い出す。今回は、新任の校長として赴任し、改めてこの校訓をどのように受け止め、具現化していくかを自分の使命と感じている。

二 学校の特徴

本校は、創立百十八年目と歴史は古く、県

校長職を楽しみたいと心躍らせているところである。

先輩諸氏におかれては、どうぞご指導をお願いしたい。

鹿児島市 前園 孝哉

内に唯一の視覚障害のある児童生徒を対象とした特別支援学校である。したがって、視覚障害に対応した、文字の拡大（拡大教科書等）や点字などを用いた学習や教育が専門的な指導の下に取り組まれる。また、あん摩・マッサージ・指圧師・はり師・きゅう師の国家資格取得のために専攻科が設置されている。専攻科の教員は、視覚障害があり、生徒のよい模範にもなっている。

乳幼児期からの相談にも対応し、在籍児童生徒は、小学部一年生から中途障害等の成人の方まで幅広い年齢層で構成されている。また、通学等が困難な児童生徒に対応し寄宿舎

も設置している。校舎等については、視覚障害者に配慮された構造で、廊下に点字ブロック、手摺りに点字表記等工夫され、環境は整っている。

三 校訓を生かしていくために

新任校長として赴任したが、新型コロナウイルスの対応に追われながら令和二年度が始まった。校長室にある校訓を見ながら、実に人間教育の核を示した校訓と考える。誠実に生きることは自分の人生を生き抜くために必要な心の在り方であり、感謝する心は、社会の中で生きていくために大切な土台である。そしてそれら心の豊かさの上に真面目に学び続ける姿勢は、人を成長させ自立する力と技を身に付ける。私はこの校訓をそう受け止めている。まさに、今の教育に必要なことではなからうかと思う。

視覚障害のある児童生徒は、日常での情報が限られるために制約を伴う。私たちが見て分かることを言葉や体全体で学ぶことになる。難解な点字の読み取りも指先の感覚に集中する。難しい生理学の用語も耳を研ぎ澄まして学ぶ。

児童生徒は学校で必死で学んでいる。そんな児童生徒には何よりも私たち教師自身が誠実に、感謝して勤勉に学ぶことが、児童生徒一人一人の自己実現を促すものだと考える。

校訓を生かすのは私たち教師でもある。

四 視覚障害教育の専門性と理解・啓発

視覚障害者のことは、白杖歩行や盲導犬というイメージは持っていても実際に関わった人は少ない。当然、視覚障害の内容やその教育についても点字や音声付き信号機などしか思いつかない。一般の方に「見える」とはどういうことと問われると、説明に戸惑うことになる。私たちにとり見えることは当然すぎるからである。

視覚障害もその程度や状態で見えることを保持したり、その代替の学習手段を獲得したりすることが必要である。その専門性の一つに、視覚障害の状態像と特性を理解することがある。そして、一人一人に応じて支援や指導方法が分かれば、学びの支援ができる、例えば、この子は26ポイント文字使用で、文字を反転して部屋の明るさをコントロールしたらよく見える。視野が狭いために書見台を用いた方がよいなどと分かると支援ができる。その基礎である視覚障害の自立活動では、弱視指導や点字指導、白杖歩行などが大切である。とは言っても、一般の方々には理解してもらえないことが少ない。

視覚障害の理解や啓発のための積極的な情報発信が今後大きな課題でもある。

五 おわりに

「通路や廊下に余計なものは置かない」「自己紹介は体の大きさや髪型など特徴が言葉で分かるように」「あれ、それ、ごらんくださいなどは使わない」「文書は墨字とテキストにして音声で聞けるように」など、以前の勤務を想起しながら本校の留意事項とその意味を確認している。卒業後、視覚障害者が目指す三療師（あん摩マッサージ師・はり師・きゅう師）についても一般の方が学び就職されることが多い。就職や社会的自立は、厳しい現状である。なんとか自立する道を模索し、保護者と一緒に努力するだけである。児童生徒が夢を持ち、社会の中で堂々と生きてほしいし、それを支えられる社会であってほしい。そのためにも今、「誠実、感謝、勤勉」の思いが生かされると考える。



ある日の校長講話



語り合おう、どんどん！

平尾小(北) 宮ノ前 香 織

私は、朝ご飯に食パンを食べました。健康のために量を調整しなくては思っているのですが、バターをたっぷりぬって食べるのが好きです。みなさんはどうでしょう。食パンに何をぬって食べるのが好きですか。近くの人と話をしてみてください。(しばらく耳を傾けると「普通はジャムでしょう。」「何もぬらないのが好き。」「えっ、普通何かぬるか、はさむでしょう。」「等の声が聞こえる。数名、発表させて黒板に表記する。)

発表してくれた人、ありがとう。たくさん出てきましたね。まだ、他にもあることでしょう。

聞いてみて、話してもらって初めて、食パンに何をぬって食べるのが好きなのか、みんな違うことが分かりましたね。中には、自分と好きな物が同じ人があることも分かりましたね。それから、好きな物が一つに決めきれない人もいたようです。中には、特に好きな物はないという人もいました。自分の周りのみんなが、どんなことが好きで、どんな考えをもっているのかは、聞いてみると分かるのですね。そして、自分が何が好きで、どんな考えをもっているのか、話をすると分かってもらえるのですね。

それからもう一つ。先ほど、みなさんにパンに何をぬるのが好きかを尋ねた時、あちらこちらから「普通」という言葉が聞こえてきました。自分が思っている「普通」と他の人が思っている「普通」が違うことに、みんなは気がつきましたか。自分の考えは「普通」だと思っていたことも、実は、みんな違うこともよく分かりました。

あれれ、何だか、みんなの顔が笑顔になっています。聞いてもらうとうれしくなっていて、教えてもらうともっとうれしくなりましたね。さあ、みなさん、学校でも家でも地域でも、どんどん語り合いましょね。

ブーメランの法則

桜山小(南) 原 口 雅 也

今日は、皆さんに「知っていてほしいこと」があります。少し難しい話です。よく聴いてみてくださいね。それは、何ですかというと、

私たちの生きているこの世界には、どうやら「ブーメランの法則」というものがあるらしい。ブーメランは分かれますか。こんな形をした投げる道具で、投げたら自分のところへ返ってきます。法則というのは、「さまり」「ルール」という意味です。

つまり、「ブーメランの法則」というのは、「自分がしたことは、いつか自分に返ってくる」という「さまり」です。

具体的に言うと、「自分が誰かにいじわるをしたら、いつか自分も誰かからいじわるをされる。」外にも「自分が誰かの悪口を言ったら、いつか自分も誰かから悪口を言われる。」

「えーっ、怖いな。」と思ったかもしれませんが、逆でも、怖くはないのです。なぜかと言うと、逆もあるからです。

どういうことですかと言うと、「自分が誰かに親切にしたら、いつか自分も誰かから親切

にされる。」外にも、「自分が誰かに優しい言葉を言ったら、いつか自分も誰かから優しい言葉を言ってもらえる。」

つまり、「ブーメランの法則」というのは、いいことも悪いことも、「自分がしたことは、いつか自分に返ってくる」という「きまり」です。

このブーメランの法則というのとは、ときには、「鏡の法則」と呼ばれたり、「原因と結果の法則」と呼ばれたりすることもあります。校長先生は、このお話を三十歳のときに初めて知りました。もともと早く知っておけばよかつたなあ、その時思いました。

どうせ返ってくるなら、「うれしいこと」がいつばい返ってくると思います。そのために、周りの人がうれしくなるようなことを、たくさんできるように頑張ってほしいと思います。



デモデモ星人

日当山中(始) 赤崎 晃 洋

皆さんおはようございます。今日は「デモデモ星人」の話をしてしましょう。中村文昭さんという実業家の若い頃の話です。中村さんは、高校卒業後すぐに上京し、田端さんという人と出会い、彼のもとで野菜の移動販売を始めました。

それで、この田端さんですが、仕事を頼まれたら、0.2秒で「わかりました！」と言って動かないと鬼のように怒る怖い人なんです。

例えば、田端さんが、野菜を積んだ軽トラの屋根に登って何か踊れと中村さんに言うわけです。皆さんだったらどうしますか。普通は「えーっ」ってなりますよね。中村さんも「えーっ、でも僕踊ったことないですし、東京に来てまだ日も浅いですし」と尻込みしてすぐに動けず、こっぴどく叱られてしまいます。

私がお今日皆さんに覚えておいてほしいのは、そんなことが続いたある日、田端さんが言った言葉です。田端さんはこう言うんです。「人間はできない理由を思いつく名人なんだよ。」と。それは、人が自分の夢を他人に語る時、たいて

い最後に「でも…」と実現できない理由を加えるからなのだそうです。田端さんは、そんな人たちのことを「デモデモ星人」と呼んでいます。

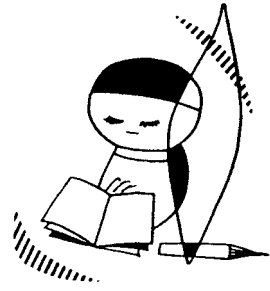
「デモデモ星人」であるうちは、自然と楽な道を選ばず、「そのうち」とか言っていたら、たぶん何もしないで終わる…。夢の実現なんて、できない理由を事前に用意している時点でありえないんだよと論じたいですね。

確かに、できない理由を考える暇があったら今の自分にやれることを一つでもやった方が確実です。また、田端さんはこうも言っています。「人は苦手なことでも、やっつてるうちに必ず慣れる！」と。

その後、中村さんは、お客さんに心から喜んでもらえる結婚式の経営者になったそうです。それが、中村さんの夢でした。皆さんも、将来への希望、夢、その実現のために今日できる何かを始めてください。



読書案内



■宮口幸治 著

ケーキの切れない非行少年たち

三体小(始) 佐々木 祐 介

「ここに丸いケーキがあります。三人で食べるとしたらどうやって切りますか？皆が平等になるように切ってください」



医療少年院に収容された非行少年たちは、驚くべきことにこの問題ができません。下のような図を書き、後は考え込んでしまうのです。

その成育歴は、多くが勉強についていけずに、学校で『厄介な子』として扱われ、友人にいじめられたり、家庭で虐待を受けたりするなどの環境に置かれていました。次第に学校へ行かなくなり、暴力や万引きなどの問題行動を起こし、少年院に入ることになる。そうやって初めて、障害があると気づかれる子どもたちが大勢いるというのです。

境界知能の人々は健常者と見分けがつきにくく、特別な支援が必要でありながら見過ごされがちです。

「非行少年の特徴として、『見る』『聞く』『想像する』などの認知機能の弱さがあります。他者の視点に立つことが難しいのです。

彼らに『もし大切な家族や最愛の恋人が犯罪被害者になったらどう思うか？』と問うと、絶対に許せないと真剣に答えます。しかし、自分がしていることが、どのような影響を与えるのかが想像できないのです。誰かが手伝ってあげれば、そこで取返しつかないことをしてしまつたと気づける。逆にいえば、そこまで言わ

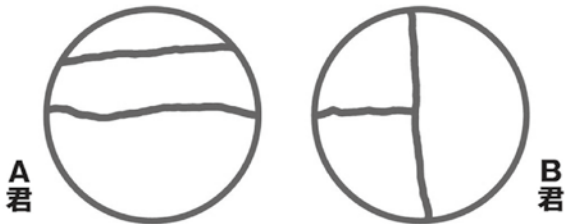
なければ、気づかないのです。」

「更生するには、自分がやった非行としつかり向き合い、被害者の立場から考えることが必要ですが、そもそもその力がない。反省以前の状態の少年がとて多い。」

と、筆者は語ります。私自身も、学校教育のあり方そのものを考えてしまいました。非行少年たちの心に寄り添うためにも、ぜひ機会があれば読んでほしい本です。

新潮新書 七九二円

非行少年が「三等分」したケーキの図



A君

B君

バッタを倒しにアフリカへ

崎原小中(大) 長崎 克則

虫取り網をかまえ、ポーズをとる全身緑色のバッタ男。突拍子もないスタイルとユニークなタイトル。思わず「どんな話なんだろう」とこの本を手にした時点で、私たちはすでに作者、前野氏の策にはまっけてしまっている。

前野氏はれっきとした博士、それも世界の第一線で活躍する「バッタ博士」である。

モリタニアの政府管轄の研究所長に「バッタ研究に人生を捧げ、アフリカを救う」と宣言し、「ウルド」というミドルネームまで授けられている。ちなみに「ウルド」というのは「子孫」という意味である。

前野氏が研究しているのはサバクトビバッタ。このバッタは、半砂漠地帯に生息し、ひとたび大発生が起ると、群れは数百億匹にも達し、東京都ほどの面積がバッタに覆われてしまうという。西アフリカだけで、年間被害総額は四百億円以上になり、アフリカにおける深刻な貧困の一因となっていることはよく知られている。

るだろう。この研究によりバッタの駆除が成功すれば、まさにアフリカを救うことができるのである。

しかし、研究には様々な困難が発生する。言葉や習慣・考え方の違いから発生する様々な問題や資金(研究費)の期限切れ(打ち切り)、さらには、異常気象のため最も重要なバッタの発生に遭遇できないという不運も……。前野氏は、それらのハプニングに翻弄されながらも、一つ一つ解決しながら前進していくのである。前野氏の武器といえは情熱と人柄そのもののみである。

それでも、この話にある種の爽やかさを感じるのは、不遇に陥っていても、人や周囲のせいにならず、ばやきながらも自力で対策を講じ、むしろ困難を克服することを楽しんでいるように思えてくるところである。

前野氏は、バッタ研究の重要性を世界的に認知してもらうために、自らが有名になることを決意する。そうすることで、バッタ問題の認知も広がり、結果としてバッタ研究で食べていくことができるようになることを考えたのだ。事実、このような積極的PR作戦のおかげで前野氏の研究も加速していくことになる。

また、地道な努力も欠かさず、京都大学の「白眉プロジェクト・センター」採用という栄誉を

手にし、現在は国際農林水産業研究センターの研究員として従事している。つまり、念願だった昆虫学者として、ちゃんと成功しているのだ。軽妙でユーモラスな文章、テンポのよい構成で読者を引きつけてはいるが、前野氏の言動の根底には「絶対に昆虫学者として食べていく」という目標に対する見事に真摯な姿勢があることが伝わってくる。つまり、彼は真面目にぶざけているのだ。

遠いアフリカの地で人生を懸け全力でバッタ(夢)を追いかけている若い研究者がいる。読後に爽快感を感じる一冊である。

光文社新書 一、〇一二頁



*** ころの詩 ***

水や草はいい方方である

はつ夏の

さむいひかげに田圃がある

そのまわりに

ちさい ながれがある

草が 水のそばにはえてる

みいんな いいかたがたばかりだ

わたしみたいなのは

顔がなくなるようなきがした

八木重吉

一般財団法人 校長会館だより

教育長異動

○新任 令和二年四月一日付

指宿市 吉元 鈴代 氏

(前鹿児島東高等学校校長)

○新任 令和二年五月三十日付

湧水町 平 幸二 氏

(元八幡小学校長)

○再任 令和二年四月一日付

霧島市 瀬戸上 護 氏

○再任 令和二年五月一日付

さつま町 原園 修二 氏

季節の言葉 「麦刈」

麦刈りて遠山見せよ窓の前 荻村

五月から六月にかけて熟れた麦を刈り取る作業。刈り取った麦は干して乾燥させるため晴れた日を選ばれる。昔は、梅雨の前の強い日差しの中での手作業であった。長袖のシャツと麦藁帽子をかぶっての作業は重労働であった。

編集

後記



昨年度末から新型コロナウイルス感染症への対応に日々追われる中、令和二年度がスタートしました。文部科学省が発行する資料に「変化が激しく先行きが不透明な社会」という文言をよく目にしますが、まさに今、こうした予測不可能な状況下において、学校経営をどのようにしていくのか、校長としての資質・能力が問われていると思います。念頭に置かなければならないのは、「児童生徒が安心・安全に学校生活を送る」ことであり、教育委員会や関係機関・団体との連携や学校間の情報共有を密にして、当面する課題に対する方策を講じる必要があると考えます。

児童生徒の新聞投稿に目を通すと「これまで当たり前と思っていた生活が、本当はとても大切なことであることに気付いた」等々、突然の臨時休業等を経験した子どもたちが「学校に行ける幸せ」を実感したことを思います。教育をつかさどる私たち教職員も同感です。今こそ「チーム学校」として、お互い知恵を出し合い、創意工夫ある教育活動を展開する時期ではないでしょうか。

最後になりましたが、御多用の折、玉稿をお寄せいただいた多くの執筆者の皆様にご心から厚く御礼と感謝を申し上げます。

豊永藤浩(清水小学校)